栃木県中学校長会報

第123号
発　行
令和４年２月４日
編　集
栃木県中学校長会広報部

令和３年度を振り返って

栃木県中学校長会長
宇都宮市立陽北中学校長
樽　井　　久

新型コロナウイルス感染症の影響は今年度も続き、まさに先行き不透明な「予測困難な時代」が到来したと言えるのではないかと思います。校長先生方におかれましては、感染防止策と学校教育活動の両立という課題と向き合い、様々な対策を講じ、生徒や教職員の健康と安全を守ることを第一に教育活動を工夫し、ウィズコロナの中で多くの決断を求められながらも、義務教育の責任を果たすべく学校のリーダーとして業務に精励されたことと存じます。

令和３年度は教育界にとって変革の年となりました。令和３年１月に中教審答申として「令和の日本型学校教育」が示されました。この中で、今年度から全面実施となった学習指導要領の着実な実施、学校における働き方改革の推進、ＧＩＧＡスクール構想の実現など、取り組むべき課題が明確になりました。さらに、すべての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現、「主体的・対話的で深い学び」の展開、「１人１台端末」の有効活用も喫緊の課題であります。このような背景を踏まえ、栃木県中学校長会では、本会の目的である「中学校教育の振興を図る」の実現に向けて、コロナ禍においても各地区校長会や各専門部との連携・協働をより強固なものとして、会員の皆様の力を結集して様々な活動に取り組んできました。

総会にて承認いただきました活動計画は、一部を除きほぼ計画通り実施し、多くの成果を挙げることができました。以下に主な取組を紹介いたします。対面開催ができました理事会（４・７・11月）、各専門部研修会（６月）、県教委と小中学校長会との教育懇談会（８月）、県教委・県立高等学校長会との懇談会（10月）、修学旅行部によるコロナ禍での修学旅行に関する情報提供、県中体連や県中文連、県中教研のコロナ禍での対応報告と共有、等であります。残念であったのは、中学校教育75年記念式典を次年度に控え、そのリハーサルも兼ねて９月に開催を準備していました研究大会が、緊急事態宣言により中止となったことです。研究発表をお願いしておりました栃木地区と足利地区の校長会の皆様方には誌上発表への変更にご対応いただきました。また、本会を代表して参加しました関地区中新潟（上越）大会並びに全日中静岡大会の研究協議会では、全体会や講演会はもちろんのこと、分科会の意見交換もオンライン開催へと変更になり、新しい生活様式を実感しました。関地区中新潟（上越）大会第７分科会において、本県から河内地区校長会の皆様がオンラインでの研究発表を行いました。

最後になりますが、令和４年度が皆様にとって、また、本会にとってより充実した年になりますようお祈り申し上げますとともに、今年度、栃木県中学校長会のために、ご支援とご協力くださったすべての皆様に心から敬意を表し、感謝申し上げます。

事務局だより

会員の皆様は、昨年度から続く新型コロナウイルス感染症への対応で、感染予防と教育活動の充実に向け大変苦労された１年間であったと存じます。新生活様式が定着する中、無観客で東京オリンピックが開催されたり、緊急事態宣言が発出されたりするなど、多くの困難が伴う中で、ワクチン接種が進み新たな日常の光も見え始めました。

そうした中、会員の皆様のご協力により多くの事業を進めることができました。感染対策を行いながら方法等を工夫し、理事会、総会、教育懇談会等、実施することができました。また、時間を意識することで、より的をしぼった会議となりました。

研究大会は昨年に引き続き実施には至りませんでしたが、来年度こそは、中学校教育75年記念事業を盛大に開催できるよう準備を進めてまいります。

今後も会員の皆様からのご意見を大切にし、本会が充実したものなるよう努めてまいります。

（事務局長　松本　良雄　事務局員　石川　昌子）

県教委との教育懇談会

総務部長　東　原　定　雄
（宇都宮市立清原中学校長）

令和３年８月５日㈭、宇都宮市のホテルニューイタヤにおいて、小・中校長会38名、県教委側は14名が出席し、ほぼ例年どおりの形で実施できました。

【中学校長会提案事項】主な内容とその骨子

１　教職員人材確保と教職員配置の改善

⑴　正式採用教員の確保
（欠補の段階的解消、臨時的任用経験期間を考慮した特別選考の検討）

⑵　免外及び臨免対応解消のための会計年度任用職員の増員・配置

⑶　学力向上、生徒指導、不登校対応加配の拡充

⑷　特別支援学級担当教員の育成と正式採用教員の配置の推進、並びに教員の配当基準の見直し

⑸　個別支援充実のための会計年度任用職員増員

⑹　スクールカウンセラーの勤務日拡充と資質向上

⑺　教員免許更新制度の撤廃に係る国への要望

２　確かな学びを育む教育の充実

⑴　個別最適な学びの推進のための環境整備

⑵　一人一台端末の活用促進に資する取組推進

３　学校の働き方改革推進のための環境整備

⑴　スクール・サポート・スタッフ、専門能力スタッフの配置促進

４　アレルギー対応のための学校栄養職員の適正配置

⑴　栄養職員の配置基準の引き下げ、及び食物アレルギー対応の充実を期した栄養職員の配置増

５　新型コロナウイルス感染症対策への支援

⑴　県立高入学者選抜「特別の選抜」の実施

６　運動部・文化部部活動の在り方に関する方針に基づく取組の推進

⑴　運動・文化部部活動指導員の増員と人材確保

⑵　部活動の段階的な地域移行の推進

７　その他

⑴　教職員評価制度の検証

⑵　地域連携教員の専任化

⑶　研修等に係る出張旅費の確保

⑷　再任用制度の充実と再雇用の場の確保、改善

県教委からは、国への要望や県の施策の充実について、可能な限り努力する旨の回答がありました。

県教委・高等学校長会との懇談会

進路対策部長　加　藤　一　志
（小山市立小山城南中学校長）

令和３年10月13日㈬、栃木県教育会館において県教委、県高等学校長会と県中学校長会との懇談会を開催し、①一日体験学習②出願手続き③入学者選抜方法④その他について新規あるいはこれまでも要望してきたものを中心に、中学校長会から県教委、高校側に改善要望をするとともに、協議や情報交換を行いました。

主な回答は以下のとおりです。

１　一日体験学習について

28校で一日体験学習が中止となり、実施できなかった。高校のホームページに「Ｗｅｂ一日体験学習」欄を昨年度から設け、情報を提供している。

今後も、ホームページの充実やオンライン配信、ＤＶＤ作成等により情報発信を行っていきたい。

２　出願手続きについて

インターネット出願については、県全体のシステムに関わる問題であり、費用と時間を要することを理解いただきたい。県教委としても利便性を高めるものであることは理解している。

出願時の受理業務時間の短縮については、各高校とも努力しているが、慎重さも必要であることからある程度の時間の確保はご容赦いただきたい。

３　入学者選抜方法について

特色選抜については「県立高校の在り方検討委員会」で検討している。今後、中学校や高校から意見を頂きながら、成果や課題について検証し、今後の方針を考えていきたい。

入試に関する日程は、中学校での進路指導や事務処理に要する日数等に配慮しながら決定している。

４　その他

性別の配慮については、今年度から願書の性別欄を廃止した。女子の制服にスラックスを認めている高校も増えている。また、性同一性障害に対する校内研修も、高校側で積極的に実施している。

他にも様々な協議が行われました。詳細は、地区校長会等をとおして、お伝えしていきます。

地区校長会だより

上三川町中学校長会

上三川町中学校長会は町内３中学校（本郷中学校・上三川中学校・明治中学校）で構成されます。３校が密接に協力するとともに、宇都宮市中学校長会との連携を図りながら、それぞれが特色のある学校経営を進めています。

同一町内の３校による構成ですので、特色として連帯性と機動性があげられます。台風や地震等の災害及び各種の危機管理において早急に対応をすることが必要な場合や、学校行事等で３校が同じ取組になることが望ましいと思える場合には、直ちに連絡を取り合うことができます。町内の中学校が同じ対応になることで、家庭や地域に安心感が生まれ、落ち着いた学校経営に結びついていると感じます。

上三川町は、世界的な創作折り紙作家として知られる吉澤章氏の出身地であることから、「ＯＲＩＧＡＭＩ」の町づくりを始めました。これまで、文化祭などの学校行事等で折り紙アートづくりを行いました。現在、特色ある教育活動の一つとして継続的に取り組むための準備を進めています。

新型コロナウイルスについては、収束が見えない状況にありますが、機動性のよさを生かし、積極的な情報交換や中学校区にある小学校との連携により、学校が行う対応や家庭への依頼を同一歩調で進めています。

ＧＩＧＡスクール構想に関しては、全ての小・中学校に一人１台のタブレットが配置されています。ＬＴＥ対応とＷｉＦｉ専用の２種類があり、目的により使い分けています。オンラインによる授業の準備が進み、いつでも実施ができる状況にあります。オンライン授業の経験を重ねることはもちろんですが、その他のさまざまな活用方法についても研究を進めています。

生徒の生きる力を育むため、３校それぞれの特色を生かしながら、中学校教育を充実させていきたいと考えています。

［上三川町立明治中学校長　増渕　　忍］

下都賀中学校長会

下都賀中学校長会は、下野市４校（南河内中、南河内第二中、石橋中、国分寺中）と壬生町２校（壬生中、南犬飼中）、野木町２校（野木中、野木第二中）の計８校の中学校長で構成されています。

栃木県中学校長会はもとより、下都賀地区管内の小山市、栃木市の中学校長会と緊密に連携しながら、「会員相互の研修を深め、共通理解のもとに正しい考え方をもって学校運営にあたるよう意思の疎通を図ること」「各中学校の主体性を尊重しつつ、情報交換を深めて教育活動の活性化に寄与すること」を基本方針としています。

今年度は、『教職員の資質・能力の向上を目指した学校経営の推進』という研修テーマを設け、人材育成に焦点を当てた研究に取り組んでいます。特に教職員評価制度に焦点を当てて、積極的な人材育成を各校において推進し、その成果を持ち寄って検討し、互いの学校経営力の向上を目指しています。

今年度はまだ研究途中ではありますが、ある学校では、毎月ワンオンワンミーティングを実施し、各教職員に「10年後どうなりたいか」という長期的な視点で前を向かせ、短期的に効果の高い教職員評価と合わせて人材育成を行っています。また、ある学校では、教職20年以上のベテランには、目標・成果自己評価シートの参画・経営欄に必ず若手育成の視点を入れて取り組ませるようにしています。このように、各校の様々な手法などを持ち寄り、比較や検討を重ねて研究を進めているところです。

本会は年間７回の定例会を各学校持ち回りで実施しています。各会場校の学校経営等についての研修の後に、県中理事会や各専門部からの報告、諸課題の協議・研修、情報交換を行っています。今年度はコロナ禍で予定どおり進んでいませんが、１市２町の８名の学校長が集まり、諸課題について多角的に話し合える貴重な研修の場です。今後も、下都賀中学校長会ならではの活動を続けてまいります。

［野木町立野木中学校長　永井　啓之］

足利市中学校長会

足利市には日本最古の学校「足利学校」があります。足利市校長会では、新任校長が辞令を受けた日に、足利学校に出向き、先人達のお墓に花を手向けることが風習になっています。今年度も４月１日新任校長たちは、足利学校を訪れました。コロナウイルス感染症の対応で難しい局面の中、これから、足利市の学校を守っていく決意を墓前に誓っていました。

足利市中学校長会は、11校で構成され、年間５回の研修会を実施し、足利市の中学校教育の発展のため、教育実践の工夫、改善に努めています。

ここ数年、足利市には、様々な試練が訪れました。台風による水害、コロナウイルス感染症、山林火災、これらのことは、学校の日常的な活動を脅かしました。ある時は、職員室のすぐ横にある山が真っ赤に燃え、休校の判断を迫られたり。ある時は、避難所の開設に伴い、自分も身の危険を感じながら駆けつけたり。いろいろなことが想定を超え、突如やってきました。そのたびに、いろいろな判断が必要になりました。いろいろな情報の中、正解が見つからないこともたくさんあります。そんなときに何気ないアドバイスをもらえるのが校長会だと思います。

ある日、見通しの良い学校の校長先生から電話が来ました。「裏山からすごい雲が近づいてるぞ、そこからは見えないだろう。」「うちは、雷対応を取ろうと思うけど、どう思う」とか、一人では、難しい判断でも、色々な意見を聞くことで、判断していくことができるのです。

いろいろな試練を乗り越えてきた足利市校長会だからこそ、一丸となることができています。まさに、チーム足利だと思います。

まだまだ、コロナ禍は続きます。より校長会の連携を密にして、足利の子どもたちのためにやっていきたいと思います。

足利学校の先人達に誓いしものが集まった、足利市中学校長会、これからも「目の前のこの子」を見つめていきたいと思います。

［足利市立第一中学校長　青柳　和宏］

私の学校経営

若手教員の育成を通して

芳賀町立芳賀中学校長　大根田　佳　夫

本校は、昭和45年に３つの中学校が統合し、町内唯一の中学校として発足しました。現在は、通常学級13学級の中規模校です。日々、保護者はもちろん町民からの期待に応えるべく、文武両道の精神で学習や部活動に一生懸命に取り組んでいます。近年は、世の中の情勢に漏れず、新規採用教員が増え、教職員の年齢構成がかなり若返ってきました。

そこで、私は次の２つのことを通して特に若手教員の授業力向上を目指す中で、それに関わっているすべての教職員のレベルアップを図り、指導力向上、さらには生徒の学力向上につなげていきたいと考えています。

１　「教科担任タテ持ち制」による授業力向上

以前に、ＯＪＴ実践事例として県総合教育センターの資料にも取り上げていただいたのですが、時間割を編成する際に、一人の教員が複数学年をまたいで教科を担任するという方法です。これにより、３年間の見通しをもった指導が期待できる

とともに、同じ教科の教員同士が、授業内容や進度について情報交換をする必要性が生まれ、若手教員の授業の質の向上につながると考えています。

２　週に一度の「教科部会」の設定

時間割の中に、週１時間「教科部会」を設定することで、授業について話し合う場を確保しました。教科部会では、進度の確認だけでなく、指導法やワークシート等の教材の共有、発問の工夫などについて話し合い、その内容を毎回記録に残しています。若手教員が先輩教員から指導技術を聞ける貴重な学びの場になっています。

今年度は、町から学力向上研究校の指定を受け、教科を超えた授業研究会などを積極的に実施しており、教科部会がより有効に役立っています。

自主・尊重・協働の心を

塩谷町立塩谷中学校長　斎　藤　　学

コロナ禍は、学校教育に幾つかの暗い影を落としましたが、感染防止のためにいわゆる「三密」を避けるという新しい生活様式により、学校における生徒の共同活動を制限せざるを得なかったことは、その最たるものと思います。学校の教育活動を通して生徒に身につけさせるべきことは、学力・体力・倫理観など多々ありますが、私が特に重視したいのは、人間関係構築能力です。人間の特長は社会性であり、太古の昔から現代に至るまで、力を合わせることで数々の業績を成し遂げ、進歩・発展してきました。ですから、人が人としての能力を十分に発揮するための土台は、人間関係構築能力にあると思います。

学校におけるその育成の場面としては、授業では協働学習（学び合い）、特別活動では、学級活動や生徒会活動、学校行事、部活動などが挙げられますが、長引くコロナ禍により、これらの活動が長期に渡り縮小を余儀なくされ、内容が希薄になってしまっては、大切な人間関係構築能力の醸成・向上の機会を生徒から奪うことにつながりかねません。こういう状況だからこそ、生徒同士の絆を深め、人とつながる力を生徒たちに育てたいと考えました。

今年度、儀式・集会での話や学校だよりなどで、私が生徒に繰り返し投げかけてきたのは、人間関係を築くために、私が大切だと考える「自主・尊重・協働」の３つの心です。自主とは、自分ですべきことを考えて自ら行動すること。尊重とは、自分と異なる意見や考えを大切にし、重んじること。協働とは、お互いの違いを乗り越えて、目標を達成するために力を合わせること。非常事態宣言が解けた10月以降、中止とせずに先送りにしていた学校行事が目白押しとなり、２週間に一度、大きな行事があるような過密日程となってしまいました。私は２学期の始業式で、こう生徒に呼びかけました。「これからまさに、自主・尊重・協働の時です。この三つの心で、これから続いていく学校行事の一つ一つを、皆さんにとって価値あるものにしていきましょう。」

「集個共輝」の実現を目指して

那須塩原市立厚崎中学校長　星　　信　之

本校は今年で創立42年目を迎える、比較的歴史の浅い中学校である。開校当時のことをよく知る地域住人も多く、また、後に記念庭園や武道館を保護者・地域をあげて手作りするなど、地域からの愛着が強い学校でもある。校内は生徒たちの元気なあいさつの声が行き交い、生徒たちは明るい雰囲気のなか学習や運動に励んでいる。大変人なつっこく、また部活動にも熱心に取り組む生徒が多いのも、本校の生徒気質である。

さらなる教育サービスの充実を図るため、今年度は「生徒一人一人の個性や能力を輝かせるとともに、その輝きの総和が厚崎ブランドとなる学校作り～「集個共輝」の実現を目指して～」の経営方針を立て、特に「『定着』に焦点化した学力向上」と「不登校解消に向けた支援体制の強化」の２点を重点項目とし、丁寧な生徒支援を日々行っている。

主な具体策としては、

①　「『定着』に焦点化した学力向上」に関して

・「定着に向けた各教科の取組」の立案
・魅力ある授業の創造（課題解決学習、ＧＩＧＡスクール構想の推進）
・学校課題の解決に向けた現職教育の実践（授業研究会）
・学力向上コーディネーターとの連携(授業研究)
・朝の活動を活用した単元テストの実施
・定着率の向上を意図した反復学習と毎時の授業における振り返り過程の導入
・家庭学習の質を高めるための支援策の検討

②　「不登校解消に向けた支援体制の強化」に関して

・教育相談の充実（担任のみならず本校の強みである部活動における支援体制の拡大）
・hyper-ＱＵの結果分析と活用
・ローテーション道徳の展開
・キャリアパスポートの効果的な活用

なお、コロナ禍のため、なかなか地域と関わる活動が進んでいないことが残念である。

以上の取組に関しては、今後、各種アンケートや各種検査、指導の記録、学校評価等をとおして成果と課題を把握し、次時・次期・次年度に向けた対策の強化につなげていく所存である。

新任校長の一言

新任校長として

日光市立足尾中学校長　須　江　信　之

本校は、山間部にある小規模校で、生徒数18名。かつては足尾銅山の隆盛とともに、生徒数1500人を超える学校でしたが、銅山の閉鉱により、人口が減少し、現在に至っています。４月に着任して、やらなくてはならないことが大きく２つありました。

１つ目は、新型コロナ感染症対策です。マスコミに大きく取り上げられたことで、ご存知の方も多いと思いますが、前任の校長先生が、医学的なデータを調べて、数人しかいない教室の中でマスクを常に強制するのは、生徒にとっていかがなものか、何とかマスクをしない場面を模索できないかという、生徒目線の取り組みをしていました。それを継承するのか、否かは、大きな問題でした。私は、前校長の考え方を尊重しつつも、常時必要な場面におけるマスクの着用を指示しました。

２つ目は、令和４年４月の小中統合、小中一貫校としての出発の最終的な準備をすることでした。

統合は、小学校の校舎に中学校が入ります。職員室は一つで、別の学校組織が、小中一貫校として一つになります。そこで、まずは、先生方に来年度の学校のイメージを具体的に持ってもらう研修をしました。次に、９年間を見通した「目指す子ども像」を全員で作り、共有する研修をしました。課題は、小学校と、中学校の「文化」のギャップをどう解消していくかというところになりますが、チームとして一つの目標を目指すことによって相互理解が進むと考えています。他にも、教育目標の見直し、学校行事等教育課程の見直し、校務分掌の見直し、事務や金銭面での統合等々、令和４年４月１日にスタートするためには、やらなければならないことがまだまだ山積しています。

「生徒ファースト」の経営理念を理解して教育活動を行ってくれているスタッフに恵まれ、コロナ対策も、統合の準備も順調に進んでいます。そして、なにより、生徒の成長と明るい笑顔を見られることが、日々の原動力になっています。

コロナ感染対策と「成長の保証」

小山市立乙女中学校長　藤　田　直　美

春には思川桜と菜の花が土手を彩り、夏には緑の田園に白鷺の舞う自然豊かな乙女中学校に、新任校長として赴任し８ヶ月が過ぎました。コロナの影響による様々な制限の中でも、264名の生徒達は日常生活が送れることに感謝しながら、授業や学校行事、部活動などに精一杯取り組んでいます。そんな子ども達の姿に励まされ、温かな仲間とともに、私もこれまで試行錯誤しながら一日一日を過ごして参りました。

２年間に渡るコロナ感染拡大は我々から多くのものを奪いましたが、同時に、学校における教育活動を一から見直すきっかけをくれたように思います。今まで当然のように行われていたことそれぞれの目的をまず考え直しました。何を削り、何を残すか、また、生徒の命を守る感染対策の中で、どのように「成長の保証」をしていくか、ぎりぎりまで工夫を重ねてきました。

例えば、延期を余儀なくされた修学旅行。学校規模や生徒・保護者の希望、教職員の思い、そして何よりデータによる感染状況を予測し、市内中学校の判断も参考に、何度も検討をしました。そして決定した11月・２泊３日の東北方面へのバス旅行。幸い、当日はお天気にも恵まれ、生徒の笑顔あふれる３日間となりました。

思い返せば、校長として常に判断を迫られ、それぞれの場面で大きな責任を感じる８ヶ月でした。本当にこれでいいのかと立ち止まることもしばしばありました。しかし、だからこそ生み出した結論には説得力があり、皆が納得できるものとなりました。ですから、そんな機会を校長として迎えることができ、今ではありがたくさえ感じています。これからも、感染収束後の新しい乙女中学校の姿を教職員で共有し、今まで積極的に関われなかった地域の力もお借りして、生徒のさらなる成長を目指し尽力していきたいと思います。